北から南から

「家庭防災」から「地域防災」への架け橋

～田舎の強み、顔の見える関係～

愛媛県 久万高原町消防本部
久万高原町幼少年女性防火委員会事務局　池田 信行

1 はじめに

久万高原町は愛媛県の中央部に位置し、面積は県下最大の584km²と広範囲で、そのうち９割近くを山林が占め、人口は8,159人（2019年７月末日）です。高齢化率は県下第１位の47.8％で過疎と高齢化が駆け足に進んでいます。

過去の災害を振り返ってみると平成13年に発生した「芸予地震」で本町は震度５強を記録するも怪我人の発生はありませんでした。この地震を契機として「自分たちの地域は自分たちで守る」との思いが改めて強くなり、「久万高原町幼少年女性防火委員会」として幼年消防クラブ員・少年消防クラブ員・女性防火クラブが地域に溶け込んで活動を行っています。

幼年消防クラブ：笑顔で防災体験

2 幼少期からの防災教育

「防災」、この堅い二文字のイメージを払拭するために「楽しむ防災、笑顔で防災」を念頭に活動を展開しています。まずは「家庭防災」を主眼に置き、防火委員会の一人ひとりが体験や学習を通して身につく防災を学びます。例えば学校の避難訓練において、１１９番通報訓練を実施して、通報する側だけでなく、受ける側も体験し、友達から面白おかしく冗談も交えて情報を聴取する。本来なら緊張の場面ですが訓練であり周りの友達も笑顔になっています。この様に楽しかった防災学習・活動は、家族団らんの場で微笑ましい話題となり「家庭防災」に繋がっています。

3 タイアップしての活動

先にも述べたように高齢化の進んだ田舎町であり、地域のお年寄りをターゲットに少年消防クラブと女性防火クラブが協力して「愛の一声運動」を実施しています。この行事は、火災予防の呼びかけと手作りのプレゼントを渡している毎年恒例の行事です。高齢者宅を訪問すると「昨年に貰ったプレゼント飾っているよ」と、高齢者が笑顔になります。

地域をあげて実施するのが「地域防災訓練」で小学校を災害現場と想定して訓練を行います。園児、児童が避難後に、女性防火クラブは屋内消火栓取り扱い訓練、バケツリレー消火訓練、消防団員は放水訓練を実施します。その活動を見て、自分たちが地域の多くの方々に見守られていることに子供ながらに気づくのです。

その他にも地域で「防災キャンプ」を実施しています。これは幼年・少年消防クラブ員、女性防火クラブ員、保護者、

地域防災訓練：避難者受付名簿確認作業

教員が体験型で防災を学ぶ活動です。プールでの水難救助体験、防災食炊飯訓練、避難所段ボール寝床作り、花火取り扱いを実施して、実際に体育館で就寝しました。堅苦しい防災ではなく友達と楽しく体験をする防災であり、参加した方々は頭ではなく身を持って理解しています。

この様な活動により防火委員会の防災に関する意識が知らず知らずに向上しています。特に避難所疑似体験をした中で、「他人の声が気になった」、「床が堅くて寝にくかった」などの困難さを経験しており、有事の際にはこの経験が必ず意味をなすと考えます。

防災キャンプ：水難救助体験

防災キャンプ：防災食を自分で作り試食

4 田舎の強み

クラブ員が体験した防災情報は、ＳＮＳではなく田舎ならではの「口コミ」です。地域コミュニケーションの場面から広がることが多く、その肉声が直接的に地域防災へと変換しているのです。地域の自主防災組織での防火委員会の位置づけでも、「顔の見える関係」で横の繋がりがしっかりしており、災害時に安否確認をする場合は「この家の方はこの部屋で寝ている」、「水曜日は病院受診」などの生活情報が知らず知らずにインプットされているのです。

災害における「自助」「共助」「公助」この３つの中でも、「共助」の中に位置する「近所（助）」こそが地域防災になくてはならないものです。生活の中で当たり前に出来上がった、「顔の見える関係＝地域コミュニケーション」こそが災害時の大きな備えであります。今後も楽しく笑顔で防災学習を実践して、家庭防災から地域防災への架け橋となれるように、防火委員会としての活動を継続していきます。

防災キャンプ：防災マップ確認